

図書紹介

感染症と文明－共生の道

著者：山本太郎（長崎大学熱帯医学研究所）

発行：榊岩波書店／〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5／TEL03-5210-4054／

新書判／205 ページ／価格 720 円(税別)／2011 年 6 月 11 日発行

本書は人類の長い歴史をたどりながら、感染症と文明との深い関わりを疫学などの見地から説き明かしている。著者は、「感染症を克服する」から「感染症とともに生きる」、「感染症を消し去ろう」とするのではなく、「感染症との共生の道を探る」べきではないのかといった問題意識を歴史的視点から考察している。

プロローグ 島の流行が語る

第1章 文明は感染症の「ゆりかご」であった

第2章 歴史の中の感染症

第3章 近代世界システムと感染症－旧世界と新世界の遭遇

第4章 生態学から見た近代医学

第5章 「開発」と感染症

第6章 姿を消した感染症

エピローグ 共生の道、

次に小見出しを見ていくと、第1章は狩猟採集社会の感染症及び疫学的転換、第2章は古代文明の勃興及びユーラシア大陸における疾病交換、第4章は帝国医療と植民地医学及び「感染症の教科書を閉じるときがきた」、第6章は姿を消した感染症、新たに出現した感染症及びウイルスはどこへ行ったのかである。ほかに4つのコラム（文明の生態史観、伊谷純一郎最晩年の講義、野口英世と井戸泰、ツタンカーメン王と鎖状赤血球貧血症）、付録（麻疹流行の数理）及び参考文献がついている。

その概要は、フェロー諸島やフィジー、グリーンランドといった島国における麻疹(はしか)の大流行によって多数が亡くなったこと、新大陸の孤立したアステカやインカ文明は武力ではなく、持ち込まれた感染症によって崩壊したこと、メソポタミア、黄河、インダスの文明は多くの感染症とともに存在し、感染症が文明を守ってきたこと、中世ではペスト（中国が起源）がシルクロードの交易をきっかけにしてヨーロッパに広がり、大流行を繰り返し、それがルネッサンスの基になったこと、マラリアや黄熱病の蔓延する大陸アフリカへの進出は困難を極めたこと、ペニシリンの発見やワクチンの開発により感染症が姿を

消したこと、エイズ **SARS**、新型インフルエンザなど未だに発生する新しい感染症が跡を絶たないことなどが時系列で述べられている。

著者はいう。健康と病気は、人間が生存に際して環境にいかにか適応したかの尺度であり、人間は環境を自らの手で変える能力を手に入れた。しかし感染症との闘いによる勝利、すなわち防疫による封じ込めは大きな悲劇の準備に過ぎないかもしれない。病原体の根絶は行き過ぎた適応ではないか。むしろ大惨事に至らないためには「共生」の考え方が必要ではないか。現代文明は自然（感染症を含む）を克服し、快適になるように進歩してきたが、いま自然からしっぺ返しを受けつつあるのではないか。長い人類の歴史から学ぶのは、「克服」ではなく「共生」が進むべき道ではないかと説いている。しかしその共生も適応に完全なものがないように「心地よいとはいえない」妥協の産物であるかも知れず、ある時点で理想的な適応が次の不適応となり、それによって生物も感染症も栄枯盛衰を繰り返す。つまりこの世には理想的な適応はなく、理想的な適応と見えるものも一時的なものに過ぎないということである。

地震や津波対策にもかかわらず、未曾有の震災と大津波による被災地を目のあたりにして自然災害についても同じことが当てはまるのではないだろうかと思う。病気の原因となるウイルスや細菌は厄介者であるが、本書ではそれも生態系の一部として捉えた感染症との「共生」という新しい考え方が打ち出されている。理解はなかなかむずかしいが、考えさせられる一冊である（学会事務局）。